

エコシステム

Ecosystem
Conservation
Society-Japan

7 No. 176

July
2021



広がり始めた エコロジカル・ネットワーク

- | ゆらぐ社会・経済の土台
- | 広がるエコネットの取り組み
- | 「連携」、「間をつなぐ団体」が成功の鍵
海外の事例から
- | エコネットが社会を変える
次の10年に向けて

進み始めたエコロジカル・ネットワーク(エコネット)。川を軸としたエコネットが、自然と治水の両立と、人々の安らぎと、地域の経済発展のいしずえとなっています。

Over time, ecological networks (EcoNets) have been created in many areas in Japan. Specifically, the EcoNets along the rivers have established themselves as a foundation for harmonization of protection of nature, flood control, enjoyment for visitors, and revitalization of local economies.

川を中心とした 生態系ネットワーク

川は、森、里（まち）、そして海を連続する空間としてつなげる環境の軸として重要な役割を担っています。

この川を中心に、大型の水鳥などが再びすめる地域にするといった目標を掲げて、流域のさまざまな自然を守り、再生し、また、その間のつながりを取り戻していく取り組み「**河川を基軸とした生態系ネットワーク**」が、今、全国16の地域で進められています。取り組みが全国に広がるきっかけとなったのは、（公財）日本生態系協会が開始当初から関わっている関東地域の27市町（現在は29市町）の連携による取り組みです。同様の取り組みを含め、その中からいくつかを、ここに紹介します。

関東地域

29市町の広域連携で コウノトリの繁殖に成功

取組地域 関東地域29市町

指標種 コウノトリ、トキ

1

現在、エコネットは、森をまとまりのある形で守りつないだり、まちなかの多種多様な自然を守りつなぎながら、全国各地さまざまなかたちで少しずつ取り組みが進められています。そのなかから、川と里（まち）を対象に進んでいる「**河川を基軸とした生態系ネットワーク**」の取り組みの一部を紹介します。

広がる エコネットの 取り組み

2002年に千葉県野田市内の谷津で始まった取り組みをきっかけに、かつて関東平野に広く生息していたコウノトリやトキを指標種とする、広域の自治体連携による生態系ネットワーク形成の取り組みが、関東地域で始まりました。

国や自治体、学識者やNPO、企業などのさまざまな団体が連携して取り組みを進めるための協議会が設けられています。協議会の中心となっているのは、国土交通省関東地方整備局の河

川部局です。協議会では、取り組み全体の大きな目標を定め、定期的に状況の報告が行われています。また、協議会の下部組織として設けられた部会では、各分野の専門家や学識者などと連携して、取り組みの具体化に向けた議論と試行が重ねられています。

2010年に、関東地域の27市町長（現在29市町長）により「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」が設立され、参加自治体の連携のもと、コウノトリが降りられるように川などに浅い水辺部分を設けたり、採食の場となる水田では、農薬や化学肥料の使用量を減らしたり、食べものであるフナなどの魚が水路から田にあがることができるように魚道を設けたりする取り組みが進められています。また、地域の

左下：渡良瀬遊水地 治水対策を目的につくられた約3,300haの遊水地。国とNPOなどが連携して湿地再生の取り組みなどが行われています

下：全国初、学校給食米を全量、有機米に。千葉県いすみ市では、学校給食で提供する米すべてを有機米「いすみっこ」に切り替え、生きものとの共生に取り組む地域の農家を支援しています 写真提供：いすみ市



豊かな自然の魅力が付加価値として活かした米のブランド化や体験型の観光・教育プログラムなどを通じて、地域経済の活性化にも取り組んでいます。

2012年からは千葉県野田市でコウノトリの飼育が始まり、これまでに10羽を超える個体が野生に放鳥されました。2021年には新たに埼玉県鴻巣市でも飼育が始まる予定です。

10年以上におよぶ地道な取り組みの結果、昨年（2020年）、栃木県小山市内の渡良瀬遊水地に設置された人工巣塔で、待望のヒナが誕生しました。これは、1971年に国内で野生のコウノトリが絶滅して以降、東日本では野外で初めて繁殖に成功した事例となり



野田市江川地区の谷津 約90haの谷津の一角に2012年にコウノトリの飼育・放鳥施設がつけられました

ました。千葉県野田市で放鳥された個体と、後述する鳴門市で繁殖した個体がペアとなり、国が管理する河川区域（渡良瀬遊水地）で繁殖に成功した点においても、「河川を基軸とした生態系ネットワーク」が目に見える形で実現した画期的な成果と言えます。

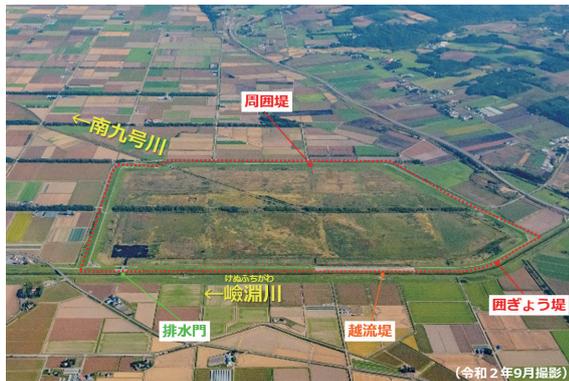
千歳川流域 2

遊水地内でタンチョウの繁殖に成功。道南、本州への分散も期待

取組地域 北海道長沼町

指標種 タンチョウ

北海道の石狩平野に位置する長沼町は、かつて沼や湿原が広がり、ツル類の繁殖地として知られていました。町



上：舞鶴遊水地の全景（北海道長沼町） 治水機能や、野生生物のすみかとなる空間の保持など、自然が持つ多様な機能を活かした新たな遊水地の整備事例として注目を集めています 写真提供：国土交通省千歳川河川事務所
右：2020年に誕生したタンチョウのヒナ（手前） 北海道の道央地域での繁殖成功により、今後、道南地域、さらに本州への分散が期待されます 写真提供：タンチョウも住めるまちづくり検討協議会

内は大規模な水害にたびたび見舞われたことから、2015年には千歳川の洪水対策として舞鶴遊水地がつけられました。

その場所は以前に大きな沼があり、土地改良が行われた後は農地として使われていました。（公財）日本生態系協会では、かつてのようにツルが繁殖する環境を再生できると考え、地元の農家の方々に、遊水地を治水のためだけでなく、タンチョウとの共生を目指す地域振興の場としての利用を提案しました。

農家の方々は、遊水地をつくるために200haもの農地を提供した経緯から、治水機能はもちろんのこと、地域の活性化のために遊水地を活用してほしいという希望を持っていました。その後、農家有志で話し合いを重ねて、「舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会」を設立し、遊水地を拠点にタンチョウと共生する地域づくりを進めることを町に要望しました。同会の要望に応じる形で、長沼町では1年間におよぶ検討を重ね、2016年に国土交通省と共同で協議会が設立されました。

協議会では、タンチョウのすみかとなる環境を守り、その価値を地域づくりに活かすことを取り組みの柱に掲げ、遊水地内でのタンチョウの営巣に適した水辺づくりや、特定外来生物のアライグマの捕獲、電線への衝突防止対策などが行われています。また、地域づくりの取り組みとして、町内の小学校



や高校での出前講座や、町内の事業者との連携によるタンチョウをイメージした商品の開発、タンチョウの保護と両立した観光に向けた検討などが行われています。（公財）日本生態系協会では2016年から長沼町に常勤職員を1名派遣して、地域の取り組みを継続して支援しています。



遊水地で行われた、小学生の環境学習

2020年にはこうした取り組みが実を結び、舞鶴遊水地で、北海道の道央地域では100年以上ぶりとなるタンチョウのヒナの誕生が確認されました。人工的につくられた湿地でのタンチョウの繁殖は世界的に見ても非常に珍しい事例です。

千歳川の洪水対策として流域で計画されていた全6か所の遊水地が2020年に全て完成したことから、国土交通省では、舞鶴遊水地の成功例をほかの遊水地も含めた千歳川流域に展開し、より広域の生態系ネットワークの実現に向けて検討を始めることになりました。